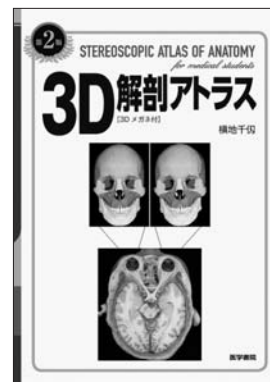


BOOK Review

3D解剖アトラス [3Dメガネ付] 第2版



評者 馬場 元毅 東埼玉総合病院附属清地クリニック・脳神経外科

「解剖学は宇宙である」……これは私が日本医科大学で初めて受けた解剖学の講義で、当時の解剖学教授であった金子丑之助先生が開口一番言われた言葉です。これを聞いた途端、解剖学の壮さ、深淵さがおぼろげながら想像でき、これから医学生として未知の学問を学ぶことに期待がみなぎったことをはっきり覚えています。そしてこの学問は、脳神経外科医になった現在の私にとっても重要な分野なのです。

本書の著者の横地千仞先生は1985年にJ. W. Rohen先生との共著である『解剖学カラーアトラス』（初版、医学書院）を出版されています。この解剖図譜は私の愛読書の一つで、拙著（Dr. BABAのメディカルイラストレーション講座、三輪書店、2017）の中にも必読の解剖学の参考書として紹介しています。

この著書の図譜は優れた写真撮影技術で撮られたもので、詳細な部分まで精密に撮影されていますが、あくまでも2次元の平面写真でした。そこで横地先生は、ご自身が所蔵されていた数千枚にのぼる人体解剖の写真の中から、立体画像（3D画像）として見ることでできるように工夫をした『3D解剖アトラス』を1997年に出版されました。この工夫というのは、対象をわずかに方向を変えて2方向から撮影し、これを肉眼で凝視すると立体的に見えてくるというものでした。これを見るためには交差法とよばれる特殊な技法が必要で、ある程度の訓練を要するため、全ての読者に、容易に立体画像を見てもらうこと

がやや困難であったと思われました。そこでこのたびの改訂では、この困難点を解決する方法として3Dメガネを用いることが提案されました。3Dメガネを用いて立体画像を見ることは最近の映画などでも頻繁に行われ、2次元映像とは全く異なる世界に引き込まれた経験をされた方も大勢おられることでしょう。

この3Dメガネを用いることで本書の価値はいくつかの点で大きく増幅したように思います。一つは、立体視することで観察しようとする対象がまさに目の前に、“手に取ることができる”位置に見えることです。元画像の写真解像度が良いので、例えば脳の連合線維束の走行も明瞭に判別できます。もう一点は、本書の携帯性です。前出の『解剖学カラーアトラス』は大型本で、持ち歩けるものではなかったのですが、今回の本はB5サイズと、携帯するにも邪魔にならず、まさしく身近なものとなった点です。

そして特筆すべき点は、組織を立体的に観察してすぐにそのページの上段に目を向けると、組織名が一覧にされていることから、解剖学的構築の理解が容易にできる点です。これこそ本書の真髄とされます。

本書は医学生をはじめ、歯学、薬学系の学生諸氏、看護師、さらに理学療法士などのコメディカル分野など、あらゆる医療に関わる方々に、必要な知識が容易に修得できる優れた著書と思われます。

横地 千仞 著

B5判／160頁／2017年／定価（本体2,900円＋税）／ISBN978-4-260-01614-8／医学書院刊